

3 カムチャツカ半島コリヤークの伝統的生業

——トナカイ遊牧の変遷——

大島 稔

カムチャツカ先住民族の概況

コリヤーク民族が居住する現在のコリヤーク自治管区は、古く1930年12月に民族管区として設立された。1977年からは自治管区と名称を変え、旧ソ連解体時にも、自治を求める活動家たちの運動の結果、1991年にカムチャツカ州から分離して自治が認められ、独立の行政単位を形成することになった。

自治管区は、北から順に北西部のペンジンスキー、北東部のオリュートルスキー、東海岸のカラギンスキー、西海岸のティギリスキーの4地区に行政区分されている。自治管区の行政の中心は、ティギリスキー地区のパラナ市である。自治管区の人口は1997年の自治管区統計局資料によると3万2142人で、人口密度は1km²あたり0.1人、北部のペンジンスキー地区は最も人口密度が低く1km²あたり0.01人である。

自治管区の先住民人口は1万694人で、自治管区全人口の約33.3%である。先住民のなかでもコリヤークが最も人口が多く、自治管区全体の約22.1%を占め、次にチュクチの約4.8%、イテリメンの約3.7%、エベンの約2.6%で、アレウトなどその他の民族は極めて少数である。

1997年のカムチャツカ半島全体の総人口は41万1000人で、先住民は1万3210人であるから、半島全体の人口に対する先住民率は3.2%である。

生業活動の現況

コリヤークの伝統的生業は、地域によってその組み合わせと割合は異なるが、トナカイ遊牧、陸獣と海獣の狩猟および漁撈であった。旧ソ連時代の集団化

(コルホーズ)・国営化(ソフホーズ)政策のもとで、製材、畑作、養鶏、養豚、酪農など新産業が導入された(図II-2.3.1参照)が、結果として、伝統的生業を捨てさせて全く新しい産業構造に転換するには至らなかった。その意味では、総体的に見ると、旧ソ連時代を通じてトナカイ遊牧をはじめとする伝統的生業とそれを基盤とするコリヤークの伝統文化は比較的保持されてきたといえる。しかし、現在、トナカイ遊牧が産業として危機に瀕しているのは否定しがたい事実である。

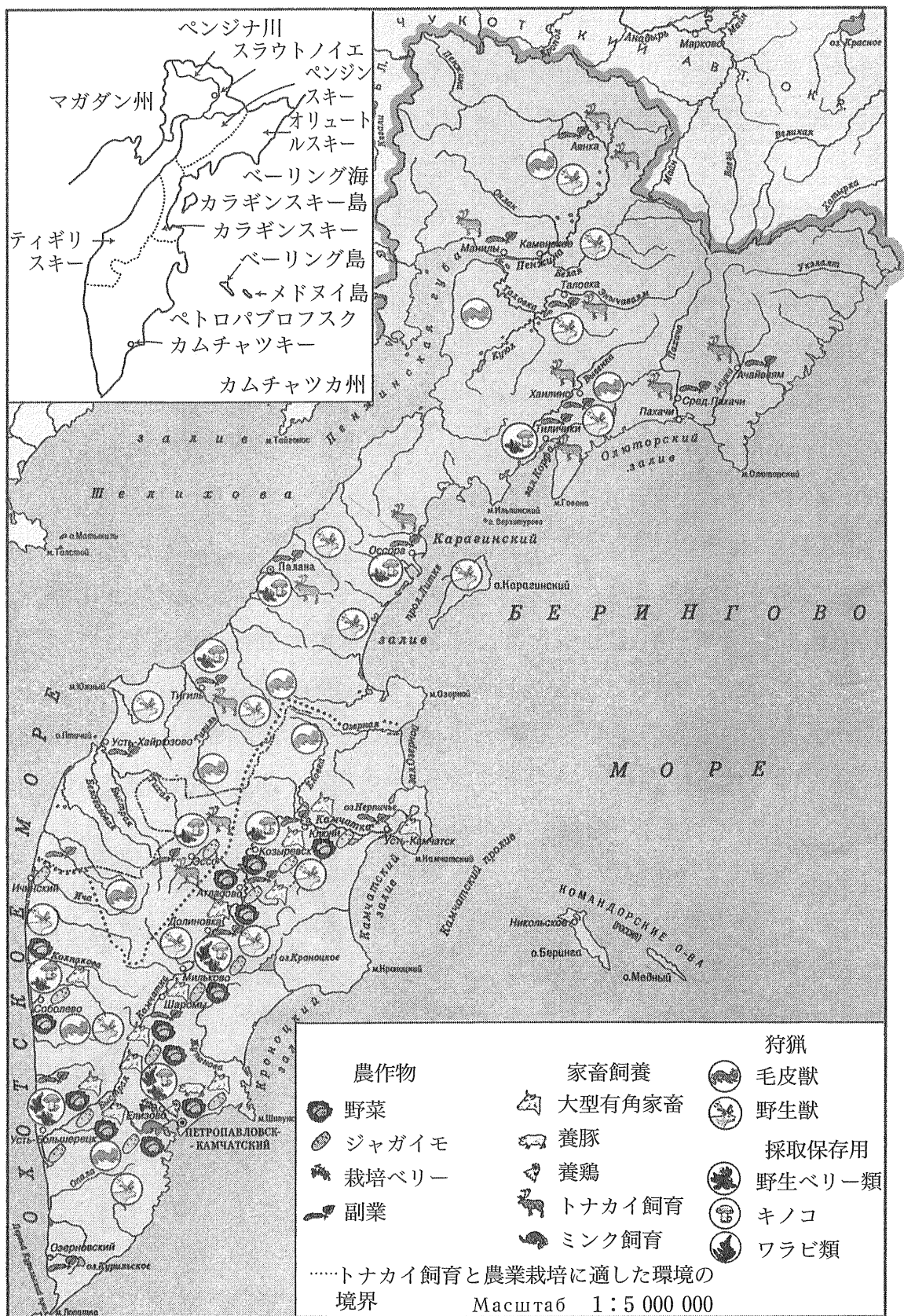
コサックの将校ウラジミール・アトラソフのカムチャツカの「発見」(1697年)から数えて1997年時点で300年間になる。そのような長期にわたり、近・現代文明と直に接触してきたわけであるから、カムチャツカ先住民の文化が外的要因により変化を余儀なくされてきた事実は否定できない。

近代化の恩恵として、医療施設、学校教育、飛行機、モーターボート、電話通信や、夏に交替で休暇をとれること、退職者の老人ホームなどを挙げる先住民も多い。しかし、一方で、トナカイ遊牧に関する日常の儀礼や芸能は保持されているものの、春や秋、冬、そして交易の際の大規模な祭りなど行われなくなった祭りも多く、特に1960年以降は古い伝統が急激に失われてきたと嘆く先住民も多いのである。

分析の視点

「北方における近代的開発」がカムチャツカ半島先住民の生業・社会・文化に及ぼした影響を分析・評価するためには、①トナカイ遊牧・狩猟・漁撈という伝統的生業に加えて、毛皮を税として徴収する「ヤサク」に関わる罾猟と交易が生業活動の中心であった帝政ロシア期(この時期に野生トナカイの減少など伝統的狩猟に変化が生じる)、②旧ソ連時代の集団農場・国営農場化・遊牧民の定住化期、③ペロストロイカ(改革)以降の期間という3つの時期を転換期として捉える必要があると思われる。

これらの3つの時期に、トナカイ遊牧・狩猟・漁撈という伝統的生業と、その経済的基盤に依拠した物質文化や儀礼・信仰・芸能・言語などの伝統的文化や社会組織が具体的にどんな変化を受けたのかについて、これまでに蓄積された研究事例は決して多いとはいえないが、私自身が1991年から1998年までの



図II-2.3.1 カムチャツカ半島産業経済地図

出所) Атлас: люби и знай свой край 1995

調査で集めたいいくつかの事例(大島 1998)をもとに、②と③の転換期、すなわち、ソビエト化とペレストロイカという転換期を経て、焦点となるトナカイ遊牧生業が受けた変化とそれに伴う社会・文化への影響を分析することにする。

定住化・国営化・集住化

カムチャツカにおける最大の影響要因は、ソ連時代の国家政策によるものといえないだろうか。以下に取り上げるのは、地域住民の定住化とトナカイ遊牧の国営農場化、およびそれに伴う地方都市への集住化の問題である。

カムチャツカでは、1927年にソ連体制への組み入れが終了し、1930年にコリヤーク自治管区が制定され、以後白系ロシア人、ウクライナ人の入植が開始される。その結果、1926年に1万9000人であったカムチャツカ全体の人口が、1939年には10万9000人に達している。

1997年度のペンジンスキー地区マニルィでの調査によると、1930年代に初めて先住民もパスポートをもらうことになり、ロシア語の名前をつけなければならなくなった。苗字にコリヤーク本来の名前をつけ、個々人の名前は、ロシア語で人気のある名前を選んだという。しかし、多くの人は、パスポート上の名前とは別にコリヤークの名前を現在でも持っており、家族内あるいは親族内、村落内では、コリヤーク名を使って呼び合う。

定住化以前

定住化以前と定住化直後の転換期におけるトナカイ遊牧の状況については、当時を知る古老がまだ多くいるにもかかわらず集積された情報は少ない。現代のトナカイ遊牧と比較できるような資料のいくつかをこれから紹介する。

ペンジンスキー地区のスラウトノイエでの情報によると、定住化以前は、家族あるいは拡大家族(男とその兄弟の家族からなる)単位でトナカイを放牧しながら移動生活をし、年に1度スラウトノイエの近辺に来て、カムチャダールやアメリカ人と交易をしていたという。

1906年頃生まれのジョットバガル・バルバラ・コンスタンティノヴナも証言するように、スラウトノイエに定住する前にトナカイ遊牧をしながら移動生活をしていた頃は、1つの拡大家族単位が私有するトナカイの数は今よりも多

かった。現在、スラウトノイエに居住するコリヤークは、交易の場所に定住させられ、私有のトナカイを国営農場に供出させられたという。

1936年生まれのエベルヴォン・ニコライ・ヌテンヴァタヴィチは、父ヌテンヴァットの思い出話のなかで、移動生活の時代を次のように語った。父には、2人の妻がいた。ニコライの母と2人の兄と三男の自分と、それに1人の姉妹の1家族、父のもう1人の妻には、息子1人と娘2人。その娘たちの夫2人と独身者の他人が加わって、1つの大きなテントに部屋を区切ってみんなで住んでいた。各群が5000頭ずつ2つのトナカイの群を所有していた金持ちであったという。この数字によると12人強で1万頭のトナカイを遊牧していたことになる。

国営化の問題

定住化は、1950年代に始まる国営農場化のためである。国営化の時の記憶は現在でも鮮明で、数千頭から数万頭のトナカイを所有していた家族が、最大で50頭までしかトナカイ所有を許されなくなったという。

国営化以前は、コリヤークの人びとにとって所有するトナカイの頭数は富裕を示す基準であった。しかし、ソフホーズができた時に、各男子50頭以下の私有を許して、残りのトナカイはソフホーズに供出させられたという。現在トナカイの私有数には個人差があり、東海岸のアナプカ村での1家族のトナカイ私有数は、最大で50頭、平均10～15頭である。

ソフホーズでは、国有のトナカイと私有のトナカイが1つの群で一緒に遊牧されているため、現在でも、国有のトナカイと私有トナカイの識別には伝来の方法が用いられている。私有のトナカイには、耳の一部を切り取って目印をつけ、他人の所有するトナカイと区別している。各人がそれぞれ印をもち、例えば、右耳下1ヶ所、左右の下に2ヶ所などと区別する。

集住化の問題

トナカイ遊牧は、北部カムチャツカの地域経済の基幹産業といえるが、1935年前後にトナカイ遊牧民の定住化政策が始まり、多くのコリヤークの人たちは、ソビエト政府により新しく建設された村落への定住を強制された。1940年代

には、各地で地域の中心となる都市が建設され、村落から都市への集住化が数次にわたって実施された。カムチャツカではこうした集住化が1970年代まで続いた地域もある。

例えば、ペンジンスキー地区では、1940年にマニルィ市が建設され、ウスティ・ペンジナから遠くタイゴノス半島のイトカンまでの約20の村落の住民がマニルィに集められることになった¹⁾。しかし、人口約120人でそのほとんどがコリヤークであるパレニをはじめ、公式には廃村になり移住したことになっているが、集住化に反して年寄りが居残っている例外的な村もある。パレニでは、犬橇も使われており、イヌの生贄、狩猟儀礼、シャーマンによる治療など伝統文化をよく保存しているが、公式の村でないために診療所も駐在所もない。緊急医療救助のヘリコプターが唯一の近代的交通手段である。

集住化による廃村は、最近まで続いていた。東海岸のアナプカの住民は、1959年につくられた新アナプカに移住したが、さらに1974年にトナカイ・コルホーズの拡大ソホーズへの統合によって新アナプカが廃村となると、近隣に新しくつくられた漁業基地のイリフィルやキチガ、ティムラート、オツソラの村に移った。他の村では、仕事を見つけるのは容易ではなく、さらに移住した家族も多い。家族の絆が壊れ、アルコール中毒などで、若い多くの人が失望のうちに死んだという。

西海岸のレスナヤとレキニキの中間に位置するポトカーゲルナヤ村は、廃村になってレキニキ村に統合された。レキニキ村のトナカイ遊牧コルホーズが1970年に東海岸のティムラートに統合された後、レキニキ村も1980年に廃村になり、住民はティムラート、オツソラの村に移った。これは北部カムチャツカで最も遅い廃村の例と思われる。

遊牧方法の変化

海岸狩猟民は、夏冬ともに海岸で暮らし、伝統的にも定住性が高かったが、トナカイ遊牧民は、チュコトカ内陸でトナカイ遊牧をするチュクチと同様、夏に蚊や虻の害を避けるため風の強い海岸や山頂付近へ移動し、冬は内陸にとどまるという移動生活を伝統的に行っていた。

トナカイの餌となる草や木の葉、キノコ類が豊富にある夏の遊牧は、さほど

困難でないので、若い未熟練遊牧者にもできる仕事である。そのため、熟練者は、サケの遡上時期には遊牧を若い牧童に任せ、川の近くでサケ漁に従事する。この食料としてのサケの供給により、夏のトナカイ肉の消費が抑えられてきた。冬は地理・地形に関する知識、オオカミ対策などの必要性から、熟練者も含め、家族全員でトナカイと移動するというのが伝統的生活であった。

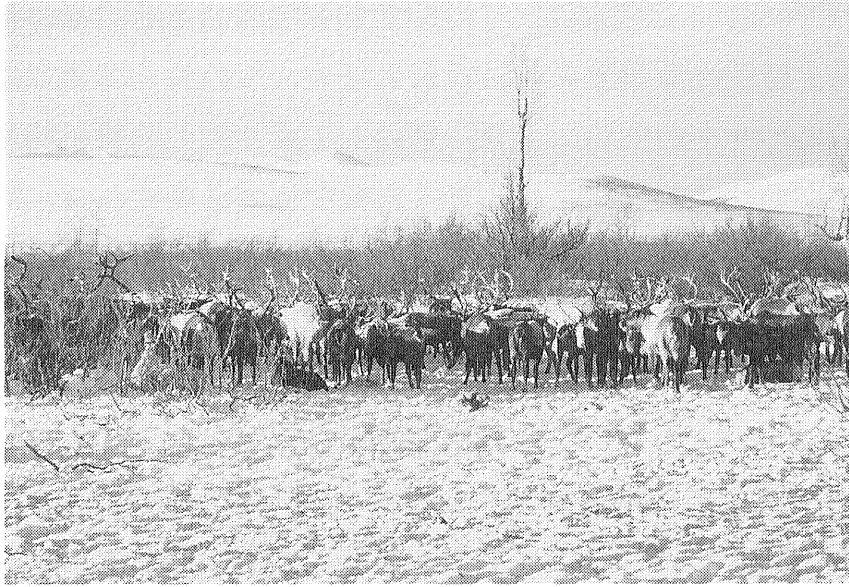
トナカイ遊牧をしてきた住民が定住し、集住化によって都市生活者となると、群をなしてトナカイ・ゴケを食べ尽くすトナカイを柵に囲い込むような飼育はできない。そのため、居住地を中心に放牧地を確定して半定住の生活、すなわち遊牧飼育に従事する専門技術者のみが、5~10人の男性と1~2人の女性から成るブリガーダと呼ばれる作業班を組織し、家族の住む都市を離れてツンドラで季節的移動を行うという生活を強いられることになった²⁾。

国営化以後のトナカイ遊牧には、ほかにも変化が見られる。スラウトノイエでの情報では、唯一の産業であるトナカイ遊牧のソフホーズができて、ロシア人が長となった。遊牧の実質的な仕事に従事しているのはコリヤークが多く、トナカイ頭数を数える仕事やトラクター運転などの新しく作り出された仕事にはロシア人が従事している。遊牧する女性従事者は、ほぼ間違いなくコリヤークである。ロシア人は、主に建築、土木、運送、行政、学校、幼稚園などで仕事をしている。いずれもコリヤークの伝統文化になかった新しく創造された労働である。

機械化のもたらした生活の変化

定住化、集住化と国営化によって変化を余儀なくされたトナカイの遊牧形態は、伝統的な移動性の生活様式に大きな変革をもたらすことになる。また、生態の観察と経験による伝統的資源管理から生産効率重視の資源管理へと経営の転換があった。

現在でも観察と経験による伝統的資源管理の方法がいくつか継承されている。例えば、トナカイを見ただけで、誰の所有するトナカイであるかを識別できる。メスよりもオスの枝角の方が大きいので、枝角で雌雄の判別ができる。また、いつもトナカイといっしょにおり、見慣れているから、体形、模様、行動の特徴、枝角などで個体識別ができるという。また、橇を牽引するトナカイには、



図II-2.3.2 スラウトノイエの冬の遊牧地

「まだら」、「顔白」、「脚白」などの毛色に関する識別名前がつけられている。経験から、春になるとトナカイがあばれることが多くなるので、枝角をつかむのは危険になるとか、病気やけがのトナカイを見分け、仔トナカイでも冬を越せないトナカイは秋に優先的に屠殺するとか、冬に殺すトナカイは、オスと年寄りのメスが主であるとかの伝統的知識を遊牧と管理に活かしている(図II-2.3.2)。

生産効率向上のため、繁殖用トナカイ数を増大させ、トナカイ橇や犬橇に代わって、トラクターやヴィズィデホートと呼ばれる万能走行車、飛行機、モーターボート、航空機、無線通信機などの導入による機械化が実施され、それに伴って輸送用および自家消費の食肉用トナカイ数が減少することになった。

例えばアナプカでは、伝統的に陸上の物資輸送にトナカイ橇と犬橇を使い分けてきた。トナカイ橇は、ツンドラで幕営地の移動に使うが、犬橇は村の近くで近距離の輸送に用いる。トナカイ橇は、普通2頭で牽くが、積荷の重さによって頭数が変わることがある。トナカイに騎乗することはないが、トナカイの背に荷駄袋をつけて荷物を運ぶことがある。トナカイとイヌを用いた輸送について、トナカイの食物であるシロゴケと草、イヌの食物である魚は現地で調達可能であり、再生産が容易である。これらに飛行機、トラクター、ヴィズィデホート、スノーモービル、モーターボートという近代的輸送機関がとって代



図II-2.3.3 ヴィズィデホートによる輸送



図II-2.3.4 スノーモービルによる輸送

わると、いずれにしても、ガソリンを必要とし、購入しなければならなくなる。これが、外来の物資に依存する体質をもたらした。機械化はまた、遊牧地の荒廃を招いた(図II-2.3.3, 図II-2.3.4)。

それでは機械化による新しい仕事の創造、分業化による生産効率の向上政策でトナカイの総数が増えたのだろうか。カムチャツカ全体で1926年に26万頭以上いたというトナカイは、1935年には9万5000頭まで一旦減少し、その後

1990年までにコリヤーク自治管区だけでも15万頭にまで回復している(Корякский Автономный Округ 2000:24)。国営化の時点で減少し、その後、65年間で頭数を回復したが、国営化以前の状態には達していない。

トナカイ遊牧民と海岸漁撈民の間にあった伝統的取引あるいはカムチャダールやロシア商人を介しての交易市の開催が衰退し、トラクター、ヴィズィデホート、スノーモービル、モーターボート、ガソリン、漁網をはじめとする外部経済に依存する率が高くなり、食料の一部もロシア化され、外部食品への依存度が高くなるという変化が見られる。パラナからスラウトノイエに来たコリヤーク商人がトナカイ肉を購入するためにヘリコプターで空輸してきた物資は、いずれも麻袋に入った米、砂糖、小麦粉、マカロニであった。また、ペンジナ湾沿岸のシェスタコヴァで樽詰の塩蔵サケとイクラを売った代価は、ガソリンと小麦粉、イモ、玉葱、イクラ用空ビン、ミルク、塩、缶詰類、砂糖、紅茶、紙巻煙草、ドライフルーツであった。

社会的側面の変化

定住化・国営化・集住化というトナカイ遊牧の近代化が社会的側面に与えた影響として、分業化による家族主義の崩壊がある。ソフホーズは、伝統的トナカイ遊牧における家族主義とトナカイ群の世襲性を破棄し、ソ連国民は誰でもソフホーズの一員になれるという平等主義のもとにソビエト体制に適合させ、中央政府の管理しやすいトナカイ生産組織をつくった。ソフホーズ長が他の地域から任命され派遣されてくる場合も多かったし、生産組織の単位である作業班の構成メンバーも伝統的家族主義をある程度は考慮しているものの、コリヤークの伝統的な絆の深い家族主義を中心とした構成にはほど遠い場合もある。

1906年頃生まれのジョットバガル・バルバラ・コンスタンティノヴナによると、スラウトノイエのソフホーズがつくられた頃の冬のキャンプでは、父方のイトコである3人の男性とその妻たちがトナカイを遊牧し、家族の者は村に残った。夏には、さらに10人の男が遊牧に携わった。国営化直後の時点では、まだ家族または拡大家族構成によるトナカイ遊牧が見られた。

地域によって異なるが、ソフホーズ遊牧グループは現在でも血族・姻族を中心に構成されていることが多い。しかし、その場合でも10人のうちに2人か

ら3人の非血縁者が含まれている。

トナカイ遊牧は、本来、地域の人びとが家族を単位として環境との間で直接に相互作用しあうという伝統的な様式を有している。自然・生態系に優しい、あるいは再生産を保証する生業システムであり、生態の観察と長年の経験が技術習得に重要であった。定住化と集住化、そして国営化が生み出したものは、これらの伝統的生業システムの変化であり、その変化は先住民自身にとって生活の悪化を意味していた。

遊牧する家族の就学児童を学校に付設された寄宿舎に住まわせる寄宿制度がもたらしたものは、伝統的トナカイ遊牧技術伝承の中断であり、学校教育で行われる近代科学の知識では代えがたい自然資源利用の伝統的知識と経験の喪失であった。集住化された都市部には、トナカイ遊牧の専門的知識をもたず、かと言ってそれに代わる他の専門的職業の教育も受けていない都市住民の労働者層が生まれることになった。

ペレストロイカ以後の変化

国営企業から市場原理の導入への変革を図るペレストロイカ以後、定住化・集住化・国営化の時代につくり出された問題はさらに深刻化しているといえよう。多くのソフホーズで経営が悪化しており、各地で私有トナカイを集めて協同で遊牧を行う協同組合方式の私企業化が進行しているのだが、ソフホーズも私企業もトナカイ頭数の大幅な減少という事態に直面している。

スラウトノイエのようなソフホーズ経営が例外的にうまくいっている場合でも、本来8つあったソフホーズの数は、5つに減っている。マニルィでも6つのソフホーズのほかに3つの私企業化した協同組合がある。人口が320人でエウエン、コリヤーク、イテリメン、ロシア人から成るアナヴガイには2つのトナカイ遊牧グループがあり、いずれもソフホーズではなく協同組合経営に変換した。1つのチームが7人で1000頭のトナカイを遊牧しているという。スレドニイ・パハチでも5つのソフホーズが3つに減少し、その代わり私企業化した協同組合が1つある。

しかし、国営化が生んだ問題が私企業化によって解決したわけではない。むしろ、ロシア経済全体の落ち込みによるソフホーズでの給与遅滞に対し、自己

防衛のために、自由に取引できる私有トナカイによる遊牧の私企業化を余儀なくされたといえる。総トナカイ頭数の減少に加えて、私有トナカイ数50頭という制限があったことは、私企業化されたトナカイ遊牧の効率を悪化させるばかりである。

ペレストロイカ以前の国有化の少なくとも50年間に新たに生み出された問題は、ペレストロイカによって何も解決されずに事態は悪化しているのが現状である。

トナカイ数減少の原因の1つに、国営化時代に毎年実施されていたヘリコプターによるオオカミの駆除がペレストロイカ以後行われなくなり、オオカミによる被害が増大したことが挙げられる。これはペレストロイカ以後中央政府からの資金的援助が途絶えたこと、さらにガソリンの不足が原因であるという。

さらに深刻な問題は、カムチャツカ全土で、若い世代のトナカイ遊牧従事者が減少していることである。ソフホーズの給与遅滞が1998年の時点で4年にわたり、トナカイ遊牧に従事する意欲がなくなっているのに加えて、伝統的トナカイ遊牧技術の子弟への教育もなくなった。それに代わる公教育での職業教育もないので、都会で育った若い世代は、トナカイ遊牧技術が未熟練のまま遊牧に従事している。それが原因で、人手不足からトナカイを売却するしかないという状況になっている。ハイリナでは、人口934人のうち、退職した老人と就学児童を除くと就労可能人口は約500人であるが、そのうち100人が失業しているという。

ま と め

カムチャツカにおけるトナカイ遊牧を例に、定住化、国営化、集住化という近・現代的文明の「開発」がもたらす先住民の伝統的生業システムへの影響を見てきた。これまでの議論は以下のようにまとめられる。

- 1) 国営化に伴う経営の近代化と機械化の意図に反して、総トナカイ頭数が国営化以前の状態に回復しなかった。
- 2) 国営化による私有トナカイの大幅な制限は、労働意欲の減退につながった。
- 3) 機械化により、土地の荒廃とガソリン購入を通じた外部経済への依存の度合いが増加した。

- 4) 地域環境に適合し再生産可能な伝統的な橇という輸送システムが失われつつある。
- 5) 定住化と集住化により家族主義が崩壊し、生態の観察と経験が必須の伝統的トナカイ遊牧技術の伝達・教育が阻害された。
- 6) ペレストロイカ以後も蓄積された問題の解決策は生じていない。むしろ悪化しているのではないか。
- 7) 文化の基盤をなすトナカイ遊牧生業が危機にあるのではないか。

注

- 1) 集住化が生んだ問題の1つに、漁場占有の問題がある。例えば、マニルイでは、町からペンジナ河左岸に個人の漁場がところ狭しと並んでいる。船を所有しない住民の間では、町から近い漁場を占有しようと競争が激しい。徒歩で2時間もかかる遠くウスチ・ペンジナの河口付近に漁場を持つ者もいる。
- 2) 海岸から遠いところに放牧地を持つマニルイ・ソフホーズのトナカイ作業班 No.5 では、夏は風通しの良い山の尾根にトナカイを放牧する。

引用・参考文献

Antropova, V. V

1964 The Koryaks. In Levin and Potapov (eds.) *The Peoples of Siberia*. pp.851-875. Chicago and London: The University of Chicago Press.

Jochelson, Waldemar

1908 [1975] *The Koryak*. Jesup North Pacific Expedition Vo.6, New York: AMS Press, Inc.

Корякский Автономный Округ

2000 *70 лет Корякский Автономный Округ Атлас 1930-2000*, Палана

Моисеев, Р. С. ред.

1995 *Атлас любви и знай свой край*. Москва: Федеральная Служба Геодезии и Картографии России.

大島 稔

1998 「コリヤークのトナカイ飼育——1996年ペンジナ地区スラウトノイエにおける調査」大島稔編『カムチャツカ半島諸民族の生業・社会・芸能』117-133, 小樽: 小樽商科大学言語センター